（研究ノート）

キャリア科目受講満足度とモチベーション向上に関する考察
―2012年度「自己発見系科目」受講生アンケート結果より―

松尾　智晶

高等教育フォーラム　第３号抜刷　平成25年３月

高等教育フォーラム　Vol. 3, 2013

キャリア科目受講満足度とモチベーション向上に関する考察
―2012年度「自己発見系科目」受講生アンケート結果より―†

松尾　智晶*
京都産業大学全学共通教育センター*

本稿では本学キャリア科目の中で最大の受講生数を擁する「自己発見系」科目に着目し、1、2、3年それぞれの受講生アンケート調査の考察結果を報告する。その結果、受講満足度は3学年すべてにおいて9割が高い満足を得ており、自己効力感、モチベーション、キャリア形成意識等を評価する共通設問では、受講前と受講後で3学年すべてにおいて大幅な改善傾向がみられた。また、当該受講生の受講目的は2年生から「自己の進路や将来について考えたい」が最多となるが、受講生が役立ったと評価する内容は、社会人ゲストの講話よりむしろ「先輩や同じ受講生との会話・交流による情報交換や議論」であることが確認できた。

キーワード：キャリア教育、自己効力感、モチベーション向上

1. はじめに

日本の大学は2007年に入学希望者と大学定員が同数になる「全入時代」を迎えたといわれる。大学進学率は2010年には54.5%となりマーチン・トロウが示した「ユニバーサル化段階」を迎えた。学習文化をもたず、低意欲の学生が入学する傾向が増える中、大学教育の見直しが図られている。その中で特にキャリア教育に着目すれば、2011年度に改正された大学設置基準で「社会的・職業的自立に関する指導等（キャリアガイダンス）の義務化」が示され、キャリア教育は一層の推進がはかられている。

しかし、キャリア教育の定義は統一されていない。たとえば関係省庁のひとつである文部科学省は「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基礎となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義し、経済産業省は「キャリア教育とは、その実施を通じて、青少年一人一人の個性・適性を見極め、将来の進路と日々の教育活動の意義とを結び付け、社会的自立に向けた力を育んでいくものである」と示している。しかし共通点として、両者とも「自立」を目標としている点に留意したい。最終的には教育受益者（学生）の自立を目指すのが、キャリア教育であるといえよう。

さらに、キャリア教育は、統一的プログラムを有さない。村上（2011）は、「キャリア教育は具体的な教育プログラムを指すものではなく抽象的な定義がなされているものであり、その具体的な意味内容は非常に漠然としている」と指摘し、藤田（2003）は「全学校を対象とできる画一的なプログラムなどはなく、各学校の実情に応じた独自のプログラムを設けるべき」であると述べる。さらに、そのプログラムは先の二省の定義に沿えば、自らが「キャリア」を選択し実践していく能力や態度を身につけ「自立」を果たせる内容であることが望ましい。それにはいかなる教育内容が適切であろうか。上西（2007）が主張するように「大学におけるキャリア支援・キャリア教育にとって（中略）自ら学ぼうという動機づけ、人と積極的に関わっていこうという動機づけ、積極的に行動していこうという動機づけが重要となる。そのような動機づけのためには、従来のような教室形式のガイダンスでは効果がない」とすれば、いかなる教育を、どのような形式で提供することが適切なのか。

このようにキャリア教育の定義・プログラムが具体的に定まっていない中、本学ではキャリア教育科目の量的充実と質的多様化を推進してきた。本稿では、本学のキャリア教育の成果について、ある一つの科目群を対象として受講生満足度と意欲、自己効力感について検証する。具体的には受講生アンケート調査結果を概観し、動機づけや自立意識を高めるプログラムについて考察する。そして、これらの結果を今後のさらなる本学キャリア教育内容の充実に資することとしたい。

2．本学のキャリア科目と自己発見系科目

2.1. 本学のキャリア科目

本学のキャリア科目は平成16年（2004年）に文部科学省により現代的教育ニーズ取組支援プログラムとして採択された『日本型コーオプ教育　―オン・キャンパス学習と就業体験との融合による「多層サンドイッチ方式の展開―』の推進から、一層の拡大・充実が図られた。

平成24年度（2012年）には18科目が開講され、受講生は１年間に全体で4000人弱にのぼる。科目は４つに大別され、それぞれは「自己発見系科目」「インターンシップ科目」「PBL科目」「実践系科目」である。

本学のキャリア科目の特徴は、必修ではなく選択制のため、学生の自主自立性を損なわない配慮がなされている点と、学部横断的に８学部すべての学生が受講する点、１、２、３、４年生と継続性のあるプログラムを有する点が挙げられる。特に継続性が高いのが、「PBL（Project Based Learning：課題解決型授業）」と、「自己発見系科目」である。PBLは、１、２、３年と継続して受講されることを前提として開講されている。自己発見系科目は連続受講が前提にはなっていないものの、当該科目受講生は１年生1,499名、３年生1,097名となっており、学年の半数および３分の１を占める割合であることから一定数の継続受講者がいることが想定される。

2.2. 自己発見系科目

自己発見系科目は、１年生対象「自己発見と大学生活」、２年生対象「大学生活と進路選択」、３年生対象「大学生活とキャリア・プラン」の３科目で構成されている。１年生科目は2011年に「キャリアデザイン基礎」「チャレンジ精神の源流」「自己発見と大学生活」の３科目を統合した。受講生とクラス数は以下の通りである。

図表１.自己発見系科目受講生とクラス数（2012年実績）

科目名	受講生数	クラス数
自己発見と大学生活（1年）	1,499	15
大学生活と進路選択（2年）	305	3
大学生活とキャリア・プラン（3年）	1,097	8

クラスはいずれも経営学部教員が主担当であり、１年生科目担当は各学部専任教員と特任教員、２・３年生科目は主担当教員と特任教員、非常勤講師で運営されている。

授業内容は共通シラバスに基づいて開講されており、特に１年生科目はFDの観点から新任の教員が担当することもあるため、2012年に本学が独自に作成した「ティーチングガイドブック」に基づいて授業進行がなされている。

「自己発見系科目」ではキャリア教育研究開発センター独自のアンケート調査が実施され毎年報告書が作成されているがこれまで外部発表はなかった。また2012年より、調査紙は３学年ほぼ同内容とし、学年比較が出来るように工夫した。これは他科目にはない特徴である。さらに、受講前と受講後の自己の能力、意欲、姿勢に関する評価の設問を加え、学生の自己成長感測定が可能になった。

次章以降に各学年の自己発見科目アンケート調査結果を示し、本科目群が学生に与える動機づけと意欲・能力向上に関する成果と今後の課題について考察する。

3．自己発見系科目アンケート調査

自己発見系科目のアンケート調査については、第２回及び最終授業時に授業時間内にて質問紙調査形式で実施されている。１年生科目は全クラスで行われているが、２、３年生科目では統一的実施は行われていない。そこで、今回の調査結果は筆者が担当したクラスの結果のみを報告する。筆者が担当した受講生数の全体に占める割合は、１年生科目では14.7%、２年生科目では33.8%、３年生科目では33.5%であるため、一定の傾向は測れると判断した。

3.1. 自己発見と大学生活（１年生科目）

有効回答数188、回収率85.4%

筆者は本科目15クラスのうち２クラスを担当した。

<u>１）どうやってこの科目のことを知ったか</u>

回答は多い順に、「新入生オリエンテーション（55.5%）」「POST（学内イントラネット上電子掲示板）の掲示をみて（17.0%））」「履修相談（11.0%）」であった。

<u>２）受講する一番の目的は何か</u>

回答は多い順に、「たくさんの友達をつくりたかったから（33.5%）」「これからの大学生活を考えたかったから（23.9%）」「自分の将来の進路や就職について考えたかったから（15.4%）」であった。１年次向けキャリア科目として、本人のキャリア形成に資する体験を求める姿勢が次点と三位に見られたことは評価したい。また初年次教育では大学生活にソフトランディングすることも目的のひとつであるが、全体の３割以上が友人をつくることを受講目的に挙げた点は、受講生の当該科目への期待として認識しておく必要があろう。

注意したい点は、「特にはっきりとした目的はなかった」の回答が18.0%と約２割に上っていることで、受講意

識が曖昧なままとりあえず受講していた層が少なくないことである。さらに本科目は後半、学生同士の少人数グループワークによるプレゼンテーション作成と発表が授業の核となるが、「少人数のクラスで意見を交換したかったから」という回答がわずか2.6%だったことも、今後の授業運営において留意したい点である。

３）受講前と受講後で自分にどのような変化があったか

ここでは５つの項目について、それぞれ５段階評価で受講前と受講後の自己評価に対する回答を得た。

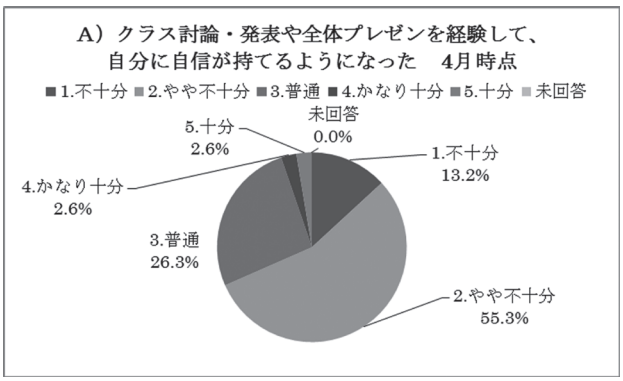
【項目】
A）クラス討論・発表や全体プレゼンを経験して、自分に自信が持てるようになった
B）自己発見レポートやクラス討論を通じて、自分の事がわかるようになった
C）将来の仕事や大学生活の過ごし方について、真剣に考えるようになった
D）社会人、先輩、クラスの人の話を聞いて、何かに取り組もうとやる気が高まった
E）コミュニケーション力や議論、討論の能力が上がった

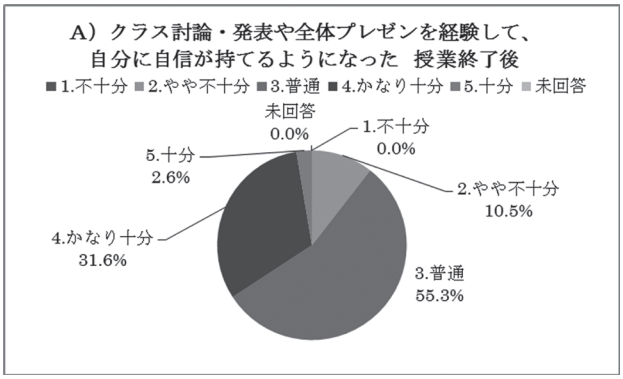
【評価】５段階
不十分、やや不十分、ふつう、かなり十分、十分

結果、５項目すべてにおいて、「不十分、やや不十分」の回答が減少し、「かなり十分、十分」の回答が増加した。具体的には、４月に５項目に対して「不十分、やや不十分」と回答した合計割合は全体の48.8%であったが終了時にはそれらが5.0%と激減しており、逆に「かなり十分、十分」と回答した割合は、４月には8.4%であったが終了時には58.2%という大幅な伸びがみられた。自己評価であることを留意しなければならないが、受講生には明らかにポジティブな変化がみられた。

次に自己効力感に関する項目に着目した。図表２に示されたように、項目A）「クラス討論・発表や全体プレゼンを経験して、自分に自信が持てるようになった」は、４月時点で「不十分（13.2%）」「やや不十分（55.3%）」であったのが、終了時には「不十分」が０%、「やや不十分（10.5%）」となり、「かなり十分」「十分」に関しては４月時点で両方2.6%だったのが、終了時には31.6%、2.6%と自己評価が高まる傾向がみられた。

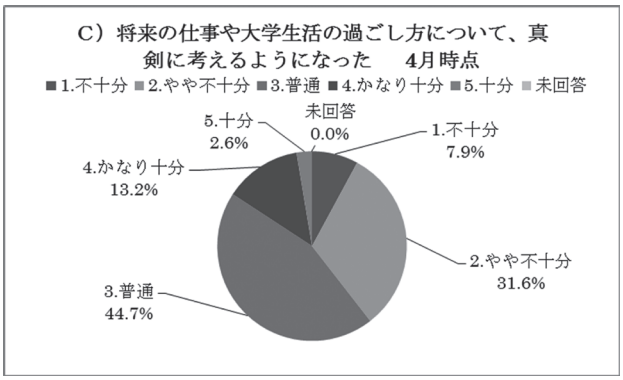
図表２．自己効力感に関する変化（１年生科目）

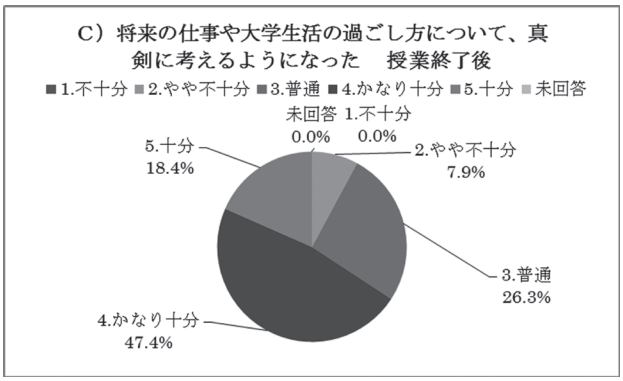




さらにキャリア形成に対する意識に関する項目に着目した。図表３で示すように、項目C）「将来の仕事や大学生活の過ごし方について、真剣に考えるようになった」では、４月時点で「不十分（7.9%）」「やや不十分（31.6%）」であったのが、終了時には「不十分」が０%、「やや不十分（7.9%）」となった。４月時点で「かなり十分（13.2%）」「十分（2.6%）」だったのが、終了時には47.4%、18.4%と評価が顕著に高まっている。

図表３．キャリア形成意識に関する変化（１年生科目）





4）この授業で役に立ったと感じること

回答は多い順に、「大学の先輩から大学生活の過ごし方の体験談が聞けたこと（31.9%）」、「他の学生と大学生活の過ごし方について議論ができたこと（19.7%）」、「社会人から仕事、社会人のキャリアデザインについて話が聞けたこと（16.5%）」であった。

社会人よりも、むしろ身近な同級生や先輩と情報交換や議論が出来たことを評価する傾向がみられた。

5）満足度

非常に満足している・満足している（51.1%）」、「どちらかというと満足している（39.4%）」、「あまり満足していない・ほとんど満足していない（6.9%）」という結果であった。半数以上は高い満足を示し、平均的な満足度も加えると、9割以上が満足と回答している。

3.2. 大学生活と進路選択（2年生科目）

有効回答数103、回収率92.2%

筆者は本科目3クラスのうち2クラスを担当した。

1）どうやってこの科目のことを知ったか

回答は多い順に、「講義要項（シラバス）（43.3%）」「先輩や友人に聴いて（21.7%）」「キャリア科目パンフレット（20.0%）」であった。

4割を超える受講生がシラバスを参考にしていることは、授業内容に関心を持っている傾向をあらわしている反面、1年生科目で17.0%が回答した「POST」は、9.2%となり、POSTへの意識が若干弱まっている可能性も示唆された。

2）受講する一番の目的は何か

回答は多い順に、「自分の将来の進路や就職について考えたかったから（49.5%）」「これからの大学生活を考えたかったから（20.0%）」であり、その他「キャリアについて学びたかったから（8.4%）」「クラス内で意見を交換したかったから（7.4%）」であった。2年次から将来について考えたいという意欲と思いのある学生が受講生の半数以上いることが伺える。ここで、次点の大学生活を考える意欲を示した学生が全体の2割である点に留意したい。すなわちキャリアとは継続性をもつため、将来を考えることは現在の日々である大学生活について考えること抜きには果たせない。しかしながら、学生の意識は直面している大学生活よりも、将来の進路や就職に高く向けられているのである。

注意したい点は、「特にはっきりした目的はなかった（11.6%）」である。1年次の回答割合18.0%よりは改善傾向がみられるものの、他の回答である「キャリアについて学びたかったから（8.4%）」、「クラス内で意見を交換したかったから（7.4%）」よりも高い割合を占める1割強の無目的層には、授業開始後の適切なケアと動機づけの工夫が必要となろう。

2）受講前と受講後で自分にどのような変化があったか

ここでは5つの項目について、それぞれ5段階評価で受講前の受講後の自己評価に対する回答を得た。なお、5項目は2年生科目と3年生科目で共通化し、内容は3学年ほぼ同様としている。

【項目】

A）自分に自信が持てている
B）自己理解が出来ている
C）将来の仕事や大学生活の過ごし方について、真剣に考えている
D）社会人、先輩、クラスの人の話を聞いて、何かに取り組もうとやる気が高まった
E）コミュニケーション力や議論、討論の能力が上がった

【評価】5段階

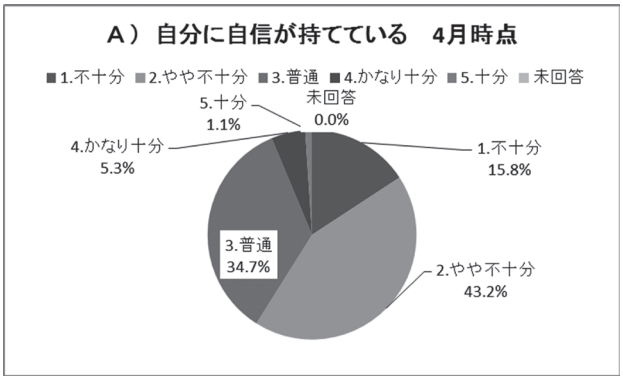
不十分、やや不十分、ふつう、かなり十分、十分

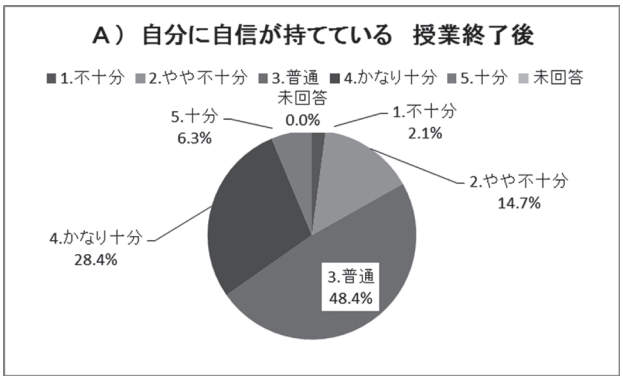
結果、5項目すべてにおいて、「不十分、やや不十分」が減少し、「かなり十分、十分」が増加した。具体的には、4月に5項目に対して「不十分、やや不十分」と回答した割合は全体の48.4%であったが終了時にはそれらが8.8%と減少しており、逆に「かなり十分、十分」と回答した割合は、4月には9.7%であったが終了時には51.8%という結果

であった。１年生科目と同様、受講生には明らかにポジティブな変化がみられた。

次に自己効力感に関しては図表４で示すように項目A)「自分に自信が持てている」は、４月時点で「不十分(15.8%)」「やや不十分(43.2%)」であったのが、終了時には「不十分」が０%、「やや不十分(2.1%)」となり、「かなり十分」「十分」に関しては４月時点で両方5.3%、1.1%だったのが、終了時には28.4%、6.3%と自己評価が高まる傾向がみられた。

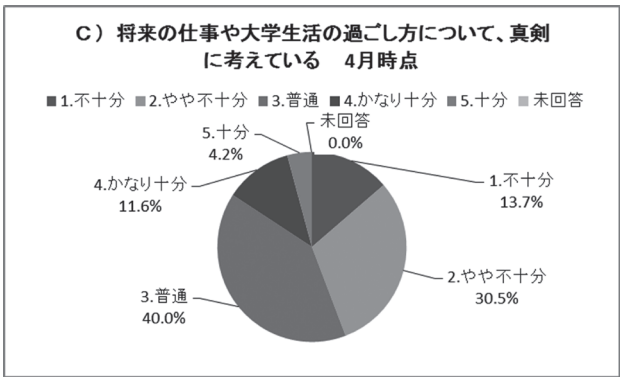
図表４. 自己効力感に関する変化（２年生科目）

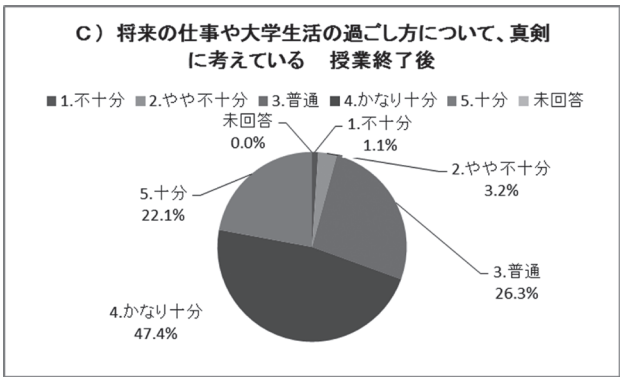




図表５にあるキャリア形成に対する意識に関する項目C)「将来の仕事や大学生活の過ごし方について、真剣に考えている」では、４月時点で「不十分(13.7%)」「やや不十分(30.5%)」であったのが、終了時には「不十分」が1.1%、「やや不十分(3.2%)」となった。一方、４月時点で「かなり十分(11.6%)」「十分(4.2%)」だったのが、終了時には47.4%、22.1%と自己評価が高まる傾向がみられる。

図表５. キャリア形成意識に関する変化（２年生科目）





4）この授業で役に立ったと感じること

回答は多い順に、「社会人から仕事、社会人のキャリアデザインについて話が聞けたこと(30.5%)」、「大学の先輩から大学生活の過ごし方の体験談が聞けたこと(26.3%)」、「他の学生と大学生活の過ごし方について議論ができたこと(17.9%)」、であった。

１年次には３位であった社会人との交流がここでは１位となり、社会を意識し始めている様子がうかがえる。また、ゼロ回答としては「小テスト等で能力向上ができたこと」、「特に役に立ったと感じることはない」の２つであった。後者は授業内容に対するポジティブな評価結果として受け取れるが、前者の結果をみると小テストの実施については今後検討の余地があろう。

5）満足度

「非常に満足している・満足している(62.1%)」、「どちらかというと満足している(34.7%)」の一方で、「あまり満足していない・ほとんど満足していない」が０%という良好な結果であった。６割以上は満足度が高く、平均的な満足度も加えると100%が満足と回答している。

６. 大学生活や将来の進路を自ら選択しようとする意欲

「意欲は非常に高まった・意欲はやや高まった」が88.4％と過半数を占め、「意欲はあまり変化がない」が8.4％、「意欲がやや低下した・意欲が非常に低下した」が０％という結果であった。

3.3. 自己発見とキャリア・プラン（３年生科目）

有効回答数334、回収率90.8％

筆者は本科目の８クラスのうち３クラスを担当した。

１）どうやってこの科目のことを知ったか

回答は多い順に、「講義要項（シラバス）（33.8％）」「先輩や友人に聴いて（26.7％）」「キャリア科目パンフレット（24.4％）」であった。

ここでも２年生科目の結果同様、シラバスと口コミで受講している層が７割にのぼった。一方、１年生科目で17.0％が回答した「POST」は、２年生科目での9.2％からさらに減少して8.7％となり、受講科目決定の際にPOSTを確認する２年生以上の学生は、全体の１割弱である可能性がうかがえた。

２）受講する一番の目的は何か

回答は、「自分の将来の進路や就職について考えたかったから」が80.2％と圧倒的な割合を占めた。その他は「キャリアについて学びたかったから（7.8％）」、「これからの大学生活を考えたかったから（6.9％）」、「クラス内で意見を交換したかったから（0.6％）」であった。３年次という就職学年では、将来について考えたいという強い思いのある学生が受講生の半数以上いることが伺える。さらに「特にはっきりした目的はなかった（2.7％）」という消極的な受講目的の回答割合が減少していることからも、当該科目受講生は、強い目的意識をもって受講している傾向が読み取れる。無目的層が少ないのが、この科目の特徴である。

３）受講前と受講後で自分にどのような変化があったか

５つの項目について、５段階評価で受講前の受講後の自己評価に対する回答を得た。なお、５項目は２年生科目と３年生科目で共通化している。

【項目】

A）自分に自信が持てている

B）自己理解が出来ている

C）将来の仕事や大学生活の過ごし方について、真剣に考えている

D）社会人、先輩、クラスの人の話を聞いて、何かに取り組もうとやる気が高まった

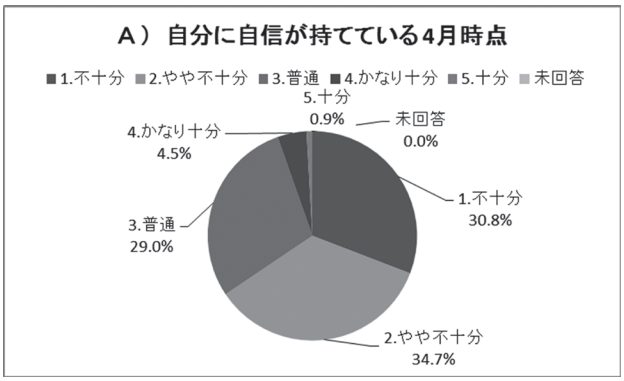
E）コミュニケーション力や議論、討論の能力が上がった

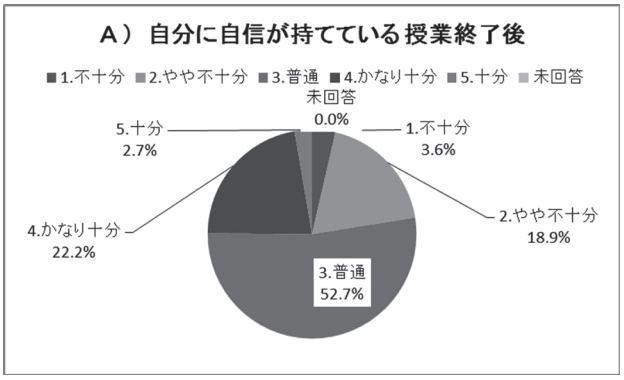
【評価】５段階

不十分、やや不十分、ふつう、かなり十分、十分

結果、５項目すべてにおいて、「不十分、やや不十分」が減少し、「かなり十分、十分」が増加した。具体的には、４月に５項目に対して「不十分、やや不十分」と回答した割合は全体の55.3％であったが終了時にはそれらが11.7％に減少しており、逆に「かなり十分、十分」と回答した割合は、４月には8.3％であったが終了時には45.9％に著しく向上していた。これは１、２年生科目と同様の結果である。

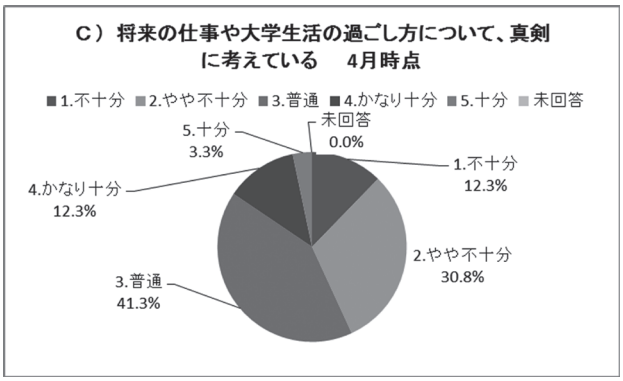
図表６. 自己効力感に関する変化（３年生科目）

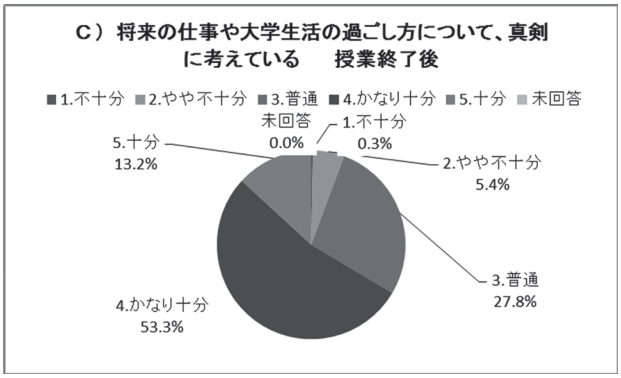




図表６自己効力感に関する項目A）「自分に自信が持てている」は、４月時点で「不十分（30.8％）」「やや不十分（34.7％）」であったのが、終了時には「不十分（3.6％）」、「やや不十分（18.9％）」と減少し、「かなり十分」「十分」に関しては４月時点でそれぞれ4.5％、0.9％だったのが、終了時には22.2％、2.7％と自己評価は向上した。

図表７. キャリア形成意識に関する変化（３年生科目）





図表７キャリア形成に対する意識に関する項目C)「将来の仕事や大学生活の過ごし方について、真剣に考えている」では、４月時点で「不十分(12.3%)」「やや不十分(30.8%)」であったのが、終了時には「不十分(0.3%)」、「やや不十分(5.4%)」となった。一方、４月時点で「かなり十分(12.3%)」「十分(3.3%)」だったのが、終了時には53.3%、13.2%と自己評価が向上した。

４）この授業で役に立ったと感じること

回答結果は、まずその他学年科目では低位であった「今後の進路選択に対する知識が増えたこと(36.8%)が最上位となった。その後「大学の先輩から大学生活の過ごし方の体験談が聞けたこと(26.3%)」、「他の学生と大学生活の過ごし方について議論ができたこと(18.0%)」が続き、「社会人から仕事、社会人のキャリアデザインについて話が聞けたこと」は9.9%と約１割であった。

注意したいのは、受講目的と役立ち感とのズレである。受講目的で「自分の将来の進路や就職について考えたかったから」が80.2%と圧倒的割合を占めながら、役立った内容では進路や就職に関して最も直接的な経験をもつ社会人の話に対して１割弱の評価しか得られていない。このことから、学生が社会および社会人の話をリアルにとらえられない、自分のこととして身近に感じられていない可能性がある。さらに、たとえば先輩の経験談は進路センターで先輩学生がカウンターに常駐して就職活動のアドバイスをする制度があり、それとの内容重複にも留意して授業運営を進める必要があろう。

５）満足度

「非常に満足している・満足している(66.5%)」、「どちらかというと満足している(30.8%)」の一方で、「あまり満足していない・ほとんど満足していない」が1.8%という結果であった。６割以上は満足度が高く、平均的な満足度も加えると97.3%が満足と回答している。

６）働く意欲

「意欲は非常に高まった・意欲はやや高まった」が81.7%と過半数を占め、「意欲はあまり変化がない」が15.9%、「意欲がやや低下した」が0.9%という結果であった。これはキャリア教育の目標から鑑みると、高く評価して良い結果であるといえる。

3.4. 考察

これまでの受講生アンケート結果を要約すると、自己発見系科目は１、２、３年生のすべてにおいて受講生の自己評価によれば、意欲とスキルの大幅な改善傾向がみられた。授業に対する満足度はポジティブな回答が全体の約９割を占め、２、３年生科目に関しては８割以上が意欲向上を自覚した。しかし結果が全ての学年で近似しており、キャリア科目の受講経験有無や受講科目の内容、大学生活の経験値が学年間の差として現われておらず、質問内容に検討の余地があると考えられる。たとえば設問「将来の仕事や大学生活の過ごし方について、真剣に考えている」においては「将来の仕事」と「大学生活の過ごし方」を分離して調査する等を検討したい。

4. 意欲向上に関する分析

自己発見科目は比較的良好な成果を挙げているといえるが、一方でその要因は何であるのか、という疑問が浮かび上がる。本稿では、特にキャリア教育で重要である「意欲向上」に着目し、２年生と３年生の意欲向上層がいかなる「受講目的」をもち、「この授業で役に立ったと感じること」をどのように評価しているのか、クロス集計から分析を試みる。

図表８. 意欲向上と受講目的のクロス集計表（３年生）

		受講目的								合計
		0	1	2	3	4	5	6	7	
意欲向上	0	0	0	3	0	0	0	0	0	3
	1	0	9	67	2	5	0	1	0	84
	2	1	12	157	0	13	5	1	0	189
	3	0	2	37	0	8	3	0	3	53
	4	0	0	3	0	0	0	0	0	3
	6	0	0	1	0	0	1	0	0	2
合計		1	23	268	2	26	9	2	3	334

意欲向上（左から１、２、３、４、５、６。０は未回答。）

意欲は非常に高まった	意欲はやや高まった	意欲はあまり変化がない	意欲はやや低下した	意欲は非常に低下した	わからない

受講目的（左から１、２、３、４、５、６、７。０は未回答）

これからの大学生活の過ごし方を考えたかったから	自分の将来の進路や就職について考えたかったから	クラス内で意見を交換したかったから	キャリアについて学びたかったから	特にはっきりとして目標はなかった	キャリア研究開発センター、教学センター、ピアサポーターから勧められたから	その他

図表９. 意欲向上と役立内容のクロス集計表（３年生）

		役立内容								合計
		0	1	2	3	4	5	6	7	
意欲向上	0	1	1	0	0	0	1	0	0	3
	1	1	33	6	26	5	13	0	0	84
	2	1	68	14	46	23	34	2	1	189
	3	0	20	4	12	5	10	1	1	53
	4	0	1	0	0	0	1	0	1	3
	6	0	0	0	1	0	1	0	0	2
合計		3	123	24	85	33	60	3	3	334

意欲向上（左から１、２、３、４、５、６。０は未回答。）

意欲は非常に高まった	意欲はやや高まった	意欲はあまり変化がない	意欲はやや低下した	意欲は非常に低下した	わからない

役立内容（左から１、２、３、４、５、６、７。０は未回答）

今後の進路選択に関する知識が増えたこと	一般常識、社会のうごきに関する知識が増えたこと	大学の先輩から大学生活の過ごし方の体験談が聞けたこと	社会人のゲスト講師から仕事や社会人のキャリアについて話が聞けたこと	他の学生と意見交換、情報交換、議論ができたこと	小テスト等で能力向上ができたこと	その他	特に充実していて、現時点で役に立ったと感じることはない

4.1. ３年生科目の意欲向上層と受講目的の関係

図表８では「意欲は非常に高まった」と回答した学生を意欲向上層とし、受講目的との関係性をみた。その結果、意欲向上層とそれ以外の層では、受講目的の割合に大きな違いはみられなかった。他の層との違いとしては、「特にはっきりとした目標はなかった」という回答が意欲向上層にはみられなかったことと、逆に「クラス内で意見を交換したかったから」という回答がみられたことである。なお、図表８では「意欲が非常に低下した」回答は０であったため、意欲向上の５は結果の記載がないことを申し添える。

4.2. ３年生科目の意欲向上層と役立った内容の関係

図表９では意欲向上層とそれ以外の層で、役立った内容との関係性をみた。その結果、意欲向上層とそれ以外の層では役立った内容の割合に大きな違いはみられなかった。

なお、「意欲が非常に低下した」回答は０であったため、意欲向上の５は結果の記載がないことを申し添える。

4.3. ２年生科目の意欲向上層と受講目的の関係

図表10では意欲向上層と受講目的との関係性は、意欲向上層とそれ以外で違いがみられなかった。意欲があまり変化しなかった層は、進路選択知識が増えた評価が０であった。

4.4. ３年生科目の意欲向上層と役立った内容の関係

図表11では意欲向上層とそれ以外の層で、役立った内容との関係性をみた結果、大きな違いはみられなかった。特徴として意欲向上層は「大学の先輩体験談」と「他学生との情報交換」への評価が０であり、学内交流以外の情報獲得に役立ち感をもつ傾向が感じられた。

図表10. 意欲向上と受講目的のクロス集計表（２年生）

		受講目的							合計
		0	1	2	3	4	5	7	
意欲向上	0	0	2	1	0	0	0	0	3
	1	0	2	8	2	0	1	0	13
	2	2	15	32	4	8	9	1	71
	3	0	0	6	1	0	1	0	8
合計		2	19	47	7	8	11	1	95

図表11. 意欲向上と役立内容のクロス集計表（２年生）

		役立内容							合計
		0	1	2	3	4	5	7	
意欲向上	0	3	0	0	0	0	0	0	3
	1	0	3	4	0	5	0	1	13
	2	0	6	5	23	21	15	1	71
	3	0	0	1	2	3	2	0	8
合計		3	9	10	25	29	17	2	95

5. まとめ

本稿では、本学のキャリア教育の成果について１、２、３年次で開講され、１年次では全学年の約半数が受講する自己発見系科目群を対象として、受講生アンケート結果を検証してきた。そこでは受講によって自己の能力、態度、意欲に大幅な改善傾向があったとの評価がなされる一方で、その要因たる効果的なプログラムが何であるかについて、明確な知見は得られなかった。既存の設問を再検討するとともに、自己発見科目を継続受講している割合をはかる設問を新たに設けて調査結果をより意義あるものとしたい。

山田(2012)は、「学士教育という大きな枠組み内で、いかに大学での「入口」にあたる初年次教育にキャリアという大学教育の「出口」に深く関連するキャリア教育を反映するかが大学にとっての挑戦でもある」と主張する。キャリア教育は大学教育において「入口」と「出口」に深く関わるがゆえに、外部からその大学の教育特徴として評価されることが多い。また、専門教育との関係性を深めて学生が自らの意欲を専門科目で発揮してゆく支援も、考慮すべき課題として挙げられる。今後も継続して当該調査を実施し検証を重ね、さらに本稿では分析対象としなかった、自己の能力を「普通」と評価する層にも着目し、有効なキャリア教育を提供する一助としたい。

謝辞

本稿作成にあたりご指導くださいました本学名誉教授後藤先生、当該科目主担当松高先生、担当木原先生、また、アンケート実施とデータ集計にご協力くださいましたキャリア教育研究開発センター林様、岩倉様、塚本様、教学センター久保田様に、心より感謝申し上げます。

参考文献

上西充子(2007)　大学のキャリア支援：実践事例と省察. 経営書院：pp.62-72

藤田晃之(2003)　教育研修. 2003.10：pp.36-39

村上純一(2011)　東京大学大学院教育学研究科紀要50：pp.315-323

山田礼子(2012)　日本労働研究雑誌629：pp.31-43

SUMMARY

This paper reports a questionnaire result. They are results of an investigation of the “self-discovery system” subject which has the number of attendance students maximum with the career subject of our university.

As a result, attendance degrees of satisfaction are all three grades, and had obtained satisfaction with high 90 percent. Self-efficacy, motivation, career formation consciousness, etc. compared attendance before with the attendance back, and the large improvement tendency was seen.

The purpose of taking a lecture on an attendance student has “I would like to consider a self course and the future”, most of all.

Useful contents were evaluation that it was conversation with a senior or a classmate from a member-of-society guest's lecture.

KEYWORDS: Career education, Self efficacy, Motivation

2013年11月30日受理

†Chiaki MATSUO*: Improvement in Motivation and the Degree of Satisfaction which Took a Lecture on Career Program

*General Education Center, Kyoto Sangyo University, Motoyama, Kamigamo, Kitaku, Kyoto, Japan 603-8555